

# 子育てしやすい町が伸びる町

with 坂東 真理子

## 日本人の働き方

**井崎** 私は20年ほど前、永住権を取って12年間アメリカで仕事をしていて、夫婦で仕事をしながら一緒に長女を育てていました。ところが、日本に帰ってきたら本当に週末にしか子どもの顔を見られないような生活になってしまったのです。日本人が日本人の家庭崩壊を促進させる仕組みをつくっているように思えて、非常に不思議でなりません。それを変えていくためにどうしたらいいのかということを考えると、これは大都市で顕著なのでしょうけれども、通勤時間が長すぎるというのが一つ、あとは会社での働き方が長時間すぎることが問題なのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

**坂東** 世界中で日本人は勤勉だとかよく言われますが、私は勤勉なのではなくて拘束時間が長いだけで、本当に働いてはいないのではないかと思うのです。私自身も34年間公務員をしていましたけれど、当時といまの生活を比較してみると、自由時間はいまの方が多いです。大学の学長というのは、それこそ24時間やるべきことは山ほどありますが、拘束されている時間は案外少ないのです。

ところが公務員は、とにかく毎朝、毎晩拘束されています。その中で時間を盗んで自分の本を書いたり、家庭のことをしたりしていたのです。いまでは、あの時の1時間当たりの生産性は非常に低かったのだと実感しています。

**井崎** 先生はいろいろな著書の中で、働き方とさまざまな子育て支援に関する政策のあり方について書かれています。国が、そして自治体が、どういう政策や施策を展開することによって、少子化対策や高齢者社会で日本が縮小経済に入っていくところから希望の見える社会に変えていくことができるとお考えなのでしょうか。

**坂東** いま日本のお父さんたちは長い間職場に拘束されています。それでも昔はそれだけ働けば出世する、収入が増えるというリターンがあったわけですがけれども、現在のような社会状況になりますと、いくら働いても管理職になれるかどうかわからない。経営者になるなど夢のまた夢で、ですから収入もあまり増えません。そのためにモラルが非常にダウンしています。だからこそいま、人は何のために働くのだろうか、お金のために働くのだろうか、それとも幸せのために働くのだろうか、と働く目的をもう一度考えなければいけないのではないかと思うのです。働く目的の中の幸せ、という時に一番大きな要素としては家族とのつながりがあります。次の世代を生むことができる、育てることができるということです。人間はいくらお金があったとしても、ヒルズ族みたいに贅沢をするお金があったとしても、結婚をして子どもを持って子どもたちを育てるといふ部分をないがしろにしている働き方は決して幸せではないと私は思うのです。日本全体が今までは出世とか

お金を持つということが、特に男性にとっては成功の証、目標だったわけですが、それを男性たちが、別の価値があるのだということを本気で考えられればいいと思います。ただその時に世界全体、日本全体が競争をしている中で、皆が頑張っているのに自分一人が一抜けたと言ったら、世の中から置いてきぼりにされるのではないかと、格差社会の中で沈んでいってしまうのではないかと、という恐怖心を多くの人が持っているのです。そうではない、新しい人生の楽しみ方、豊かさがあるのだよ、ということを自治体が一つのモデルケースとして示されるといいのではないかと思います。

## 子育てに参加することの重要性

**坂東** 私は霞ヶ関にいた時、情報は自分たちが握っているのだ、だからそれを自治体の人たちに流さなければいけないと思っていたのです。ところが埼玉県に副知事として赴任した時に実感したのは、自治体が一番最前線なのだということです。最前線で自治体に取り組んでいるベストプラクティクスを吸い上げ、霞ヶ関が工夫を加えてそれぞれの自治体に伝えていくという新しいシステムにしなければならないと感じました。実際には自治体の中でも基礎自治体である市町村が一番のフロンティアですよ。

**井崎** そうですね。苦情も真っ先に入ってきますし、それからある政策に取り組んで、その反響が手に取るようにわかるのが基礎自治体です。流山市は過去 40 年間ベッドタウンとして発展してきましたが、これまでは交通の便の問題があって通勤時間が長かったのです。私自身がそうであったように、家に帰ると寝るだけという方が多かったと思うのですが、つくばエクスプレスができて通勤時間が短くなったために、働き方を変えさえすれば平日でも少しは子育てに参加し得る環境になりました。ただこれはやはり会社、それから会社に働き掛ける国の制度がないとなかなか難しい問題です。私自身が会社勤めをしていた時もそうでしたけれども、お先に失礼しますと言にくい雰囲気がありました。

**坂東** 本当ですね。周りが皆そういう生活をしていると自分もそういう価値観になってしまうという部分は払拭できません。

**井崎** 子育てが大事だとよく言われますが、子育ては本当に子どもが大きくなってしまってから後悔しても始まりません。子どもが小さい時に子育てに参加すること、それから家庭を大事にして時間を確保すること。時間は量ではなくて質だと思いますけれども、でもまったく量がないのではやはり難しい。家庭を大事にすること、子育てに参加するということを男性が、会社で働くことと同等に大事なのだということをもう少し教育されないといけないと思います。反省をこめて。

## 父親の意識の変革

**坂東** 女性の間では、これからは仕事と子育てを両立しようという価値観がかなり浸透してきた気

がしています。例えば昭和女子大学はいわゆる良妻賢母を養成する大学として有名でしたが、いまやほとんど全員が就職を希望しています。昔は良家のお嬢さんは仕事などしないで、自宅で家事手伝いをしていて、いいところへお嫁に行くというのがあらまほしき姿だったのですけれども、今はもう全員が働くのが当たり前になってきています。ただ自信がなくて、子どもができてもしっかり働けるのは難しそう、もしそうなったら私はやっぱり辞めなければいけないのかな、と考えている女性が多いので、こちらは頑張るよと後押ししている状況です。

このように、女性の考え方は少し変わってきているのですが、男性の方がまだ頭の転換ができていないのではないかと私は思い込んでいました。ところが、私は世田谷区でNPOの「子育てステーション世田谷」という認定保育園を運営していて、そこは50人の定員なのですが、発表会などをやりますと、200人くらい観衆が集まるのです。お母さんだけではなく、お父さんとお祖父さんお祖母さんたちが来たりして、それを見ると本当に子どもは宝なのだろうなと実感するのです。そこで感じることは、最近のお父さんたちは本当に子育てに熱心なのだということです。食育の話などをすると、メモを取っているのはむしろお父さんの方。30歳前後のお父さんたちは本当に変わり始めてきています。これは私が北欧に行った時に抱いた印象なのですが、子育てを楽しめる男性というのは自分で仕事をマネジメントすることができるという意味で一種のステータスなのです。自分とパートナーが子どもを持てるような幸せな家庭を築いている。どうだ、自分の家には子どもがいるのだぞ、という感じなのです。保育所にもごく普通に男性がお迎えに行っています。朝お母さんが送って行ったら夕方はお父さんというように完全にシェアしているのです。日本ではまだそういうことに対して、お宅は奥さんが強いよね、とかご主人に理解があるよね、という風な、同情とも憐みともつかない目で見られることが多いのですけれども、ノルウェーやスウェーデンの男性たちは、どうだ、自分はいい家庭を営んでいるよ、という誇りを持っていたのがとても印象的でした。そういう点、流山はどうなのでしょう。

## 子育て政策に必要なものはサービス

**井崎** 流山おおたかの森ショッピングセンターにBayfmのサテライトスタジオがあるのですが、そこで2010年に育メンコンテストが開催されました。そのときは、たくさんの方が応募されました。流山市では、鉄道がクロスしている市内の2駅の駅前に駅前保育送迎ステーションを設けて、そこから市内のすべての公立と私立の保育園に送迎していますが、電車でお父さんが抱っこをしながら乳児を連れてきて預けていかれるという方も少なくありません。若い男性の意識は確実に変わってきたと思います。

**坂東** 本当にそういう男性が現れてきているのです。特に30前半くらいは本当に変わってきているのです。

**井崎** 変わってきましたね。本当に驚きました。アメリカにいた時の生活を思い起こすような感じ。男女共同参画という問題はあまり肩肘張って議論するよりも、具体的に、こうやって日常生活の中で楽しみながら変わりつつあるのだなあということを感じました。

## 企業の意識を変える

**坂東** お父さんたちの意識が少し変わり始めた。女性たちの意識も変わってきている中で、その次に企業の意識をどう変えるかというのが今後の大きな課題です。いま、ITを利用して在宅勤務を1週間に1日くらい認めるとか、コンプライアンスでサービス残業をなくそうという動きがあるので、いまの時代では、少しプッシュすれば若いお父さんたちは家庭で家族とかかわる時間を大事にしようという気持ちを持つことに弾みが付いていると思います。

**井崎** 優秀な人材を集めるというためにも働き方、あるいは子育てに参加できる環境づくりというのは非常に大きいですね。

**坂東** アメリカなどは本当にそうですものね。給料だけではなく、どれだけ魅力的なライフスタイルを提供できるのかということが重要視されています。ですから、私は市長に市民をひきつけるのと同様に、企業をひきつける努力をされたらどうかと思うのです。流山市にはとても若くて、先進的な考え方をする知的水準の高い市民がたくさんいますよ、どうぞここで立地しませんか、という努力ですね。

**井崎** 実は駅前送迎保育ステーションのあるビルに入っているテナントに本社を東京から移してこられた会社があります。同じビルに送迎保育ステーションがあって、保育園の分園がある。これが職員に非常に好評だと、とても喜ばれました。

**坂東** そういう形でいろいろな企業、特に女性の働いている割合の高い企業、保険会社などもそうですし、コールセンターなどを誘致されるということをぜひ働き掛けたいのではないかと思います。すると本当に職住近接になって、流山に全日制市民が増えるのではないかと思います。

どうしたらそうした誘致ができるかという、安直には法人税を安くするという話になってしまっていますが、そうではなくて、皆が応援するようなノンマネタリーのメリットを企業に提供するということは自治体にもできるのではないかと思います。例えば立地をするときに公園の近くのもいいところに場所を確保するように相談に乗るとか、企業のフォローアップサービス、育児サービスではないけれども、企業の人たちが来た時にいろいろな対企業サービスをきめ細かくフォローアップしてあげるとか、そういった形でぜひ実践していただきたいですね。

**井崎** そうですね。流山からいい事例を創っていきたいと思います。ただ、そのようなものを仕組みとしてつくるという点では、国の支援や制度がないと、自治体の個々の努力では乗り切れない部分もあります。民主党政権のときに実施された子ども手当というのは一歩前進だとは思っていますが、しかしそれを借金でやったのでは将来的に困るので、私はお金ではなくて、サービスであるべきではないかと考えているのです。

**坂東** 現金給付は実際には本当に必要とされる人たちのところへは行かないのです。現金というのは本当に効率が悪いのですね。それより例えば保育所の整備をして、そこで働く人たちのお給料の補助に充てれば、いろいろな形で波及効果が出てきますし、お母さんたちの税金も回ってくるわけです。

## ひ弱な親が増えてきた

**井崎** 例えば乳幼児医療助成というのが全国にありますけれども、だいたいどこでも最低2歳までやっていて、2歳からは自治体の財政の余力のあるところ、あるいは経営努力をしているところがどんどんそれを拡充して競争になっています。選挙のたびにそれが拡大されていく。子どもは2歳までは本当によく病気をしますが、そこから先はだんだん病気をしなくなりますよね。本当に必要なサービスと、あれば望ましいと思うサービスを峻別して、優先順位を付けていくことを自治体の経営者である首長がしっかりやっけていかないと、本当にばらまき政策にのめり込んでいってしまいます。

**坂東** 結果的にそれは将来の子どもたちの負担になるわけですから、目先の子供に飽をあげているように見えて、それは将来の重荷としてつけを回しているのですよね。これまではお金を撒いて、各家庭の好きなようにやってください、行政は口出ししません、という形で行政側は自制していたと思います。国が生活や子育てのスタイルを決めるのはよくないですが、自治体だったら、例えば流山市はこういうライフスタイルの家庭を応援しますという個性を出してもいいのではないのでしょうか。それが本当の分権で、流山市は働く若い両親を応援するのだと、子どもを2人、3人持っている人たちを応援するのだということを明確に出されるといいと思うのです。

特に私は、母親が仕事を持つこと、子育てに母親だけが携わるのではなくて、祖父母とか、保育所とか、近所の方とか、いろいろな他人がかかわることによって、子どもがたくましく育つと思っているのです。子どものためには母親が働いた方がいいというのが私の持論なのです。日本では、専業主婦がベストだと誤解している人たちがいます。ですから専業主婦を応援しようという政策が日本ではまだまだ取られています。ところが、いまの大学を見ても、あるいは小学校中学校でもそうだと思うのですけれども、本当に子どもがひ弱なのです。親もひ弱。モンスターペアレンツという言葉がありますけれども、そのモンスターというのは怖いというよりも未熟なのです。世間知らずとか現実を知らないとか。私の子どもをどうして大事にしてくれないの、的な、本当にひ弱な未熟な親が多いのです。これは母親だけではなくて、父親も含めてです。それはなぜかという、豊かな社会で、苦勞をしていないからだと言われますが、もうひとつの大きな原因は、専業主婦のお母さんの存在なのです。子どもの世話をしすぎてしまうのです。そういうところで育った男の子や女の子、両方がひ弱になっています。昔のお母さんたちは子どもがたくさんいるし、家事も忙しかったし、農業や自分の家の仕事をしている人も多かったので、そんなに一人の子どもにかまける暇がありませんでした。ですから子どもたちはたくましく育てたのですが、子

どもが1人か2人で、しかも専業主婦でオール電化だったら、やれ知育をしましょう、やれ清潔にしましょう、情操教育をしましょうとか、子どもをいじくりまわすに決まっていますよね。

## 育児保険という制度

**井崎** 先生は自治体や国ができる仕組みとして以前から育児保険というものを提案されていますが、そのことについて少しお話し願えますでしょうか。

**坂東** 私は、介護保険は縛りが多くて使いにくいとか、モラルハザードで必要のない人が使っているとか、いろいろ批判はありますし、まだ改善しなければならないところも多々あると思っていますけれども、あのお金でどれだけ高齢期がよくなっているか、それは評価しなければならないと思っています。例えば遠距離介護の問題とか、独り暮らしでも自分の住みたいところに住むことができるお年寄りが増えているのも、介護保険の下支えがあるからだと思うのですね。介護保険に関しては、ドイツでは家族が介護をした場合は現金給付をするというシステムでしたので、日本も家庭でお嫁さんが高齢者の世話をした場合は現金を給付しようという意見も一部にはあったのです。それを現金は出さない、サービスで行くのだとはっきり打ち出したおかげで、認定を受けたサービスだけを受けられるという形になって基本的にはよかったと思っています。ですから育児に関しても、現金を給付するのではなく、お母さんが働いていて保育が必要な子どもやハンデや障害を持った子ども、あるいは専業主婦でも一時保育、一時預かりを行う、そうしたサービスを保険で一割負担にする、ということが普及すれば、いろいろな立場の育児サービスを必要としている人たち全部をカバーすることができると思うのです。財源の問題ですが、扶養控除などを無くする、それから企業が負担していた家族手当の部分もそちらの方に回す。それから子ども手当の部分の回せば、ほとんど負担は増えないで必要とする人たちにサービスを供給する仕組みは可能ですよね。いま、若い人たちは自分たちがもらうころにはもう年金財政は破たんしているのではないかということで、国民年金の納付率がものすごく低下しています。それがもし自分の子どもたちが恩恵を受けることができるのだということになると、若い人の納付意識が上がるのではないかと思うのです。ぜひそういった形で、育児を皆が支えるのだという方向に持って行ってほしいと思います。子どもを持たない人が育児保険を払うのは嫌だと言うなら、それでは子どもを持ちなさいよと言えばいいのです。私は育児保険がいいと2004年ころから言っているのですがけれども、経済界や政界には残念ながらあまり賛同する人がいません。もし全国に敷衍することができなかつたら、市レベルでできるだけ、1割負担や2割負担という形で手厚い保育サービスや一時預かりサービス、あるいは子育て相談サービス、習い事のサービスなどもカバーしてもいいと思うのです。ただ、このサービスは無料ではいけません。1割、2割負担という形で全体としてのサービスの供給量を増やすというような試みをしていただけるといいと思います。できれば学齢期にも学童保育、放課後健全育成、あるいはスポーツやいろいろな活動なども含めて、子育てを応援するまちというあり方をいろいろ工夫されるといいと期待します。

## 自治体独自の育児支援

**井崎** 子ども手当は本来、財源としては国が全部出すということでした。児童手当の分だけでも、流山市は人口 16 万人ですから 2 億円以上ですね。それを原資にすれば、1 割から 3 割の負担であればかなりの部分を供給できたはずですね。ところが、子ども手当が流山市の場合は予算の 5～6% を占めています。巨額なのですね。これを優先順位の高い子育て支援サービスに転換できれば、貯金はできないかもしれませんが、子どもを育てるために必要なサービスは十分に実施できると思うのです。

**坂東** 育児交付金やあるいは介護交付金というような具体的な使い方については自治体にいろいろと工夫しなさいと言って、任せてくれるといいのですよね。基本的には任せるといふ姿勢が大切だと思います。ただ、市長のように立派な経営者がいらっしゃる自治体と、情けない経営者しかいない自治体と、格差が出てくるのが問題ですね。でもその姿を見て住民が選挙をすればいいのだし、だめだったら引越をするという選択肢があってもいいと思います。

**井崎** 格差が出ることによって、市民も議員も市長も目覚めて緊張関係が生まれますよ。夕張市が財政破たんをしたのは自治体に任せたからだと言った国家公務員がいらっしゃいますけど、あれは国家公務員が面倒をみると約束して市に借金をさせていたわけですから、本当に最後まで責任を取りなさいと言われればあれだけの過大投資はしなかったはずなのです。当時はちょうど景気対策の意味もあって、お得な地方債というのが流行っていましたから、そういう意味では自治体からも育児交付金を求めていくという姿勢を取りたいと思っています。その際はぜひご協力いただければありがたいですね。

**坂東** その際は全面的に応援させていただきます。

## 子どもたちに力をつけさせる街

**坂東** 市長にぜひお願いしたいと思っているのは、子どもたちが自分たちよりも年下の子たちの世話をする、指導することのできるシステムをつくるということです。これは小学校の 5、6 年から中学生くらいをイメージしているのですが、この年ごろは本当に生意気盛りで、保護してあげようとすると反発します。でもきちんと責任を持たせていろいろなことをさせるような場を与えてあげて、それによってたくましい子どもを育ててあげてほしいと思いますね。

**井崎** 授業でも課外活動でもそうなのですが、特に最近は一人っ子が増えていますから、そういう仕組みがあるととてもいいですね。

**坂東** 勉強を見てあげるのも、学校で先生が全部面倒をみるのではなくて、放課後に上級生が下の

子に教えてあげる。教えることが上級生自身にとってもすごくプラスになります。本当にそういった形で、流山は本当に子どもたちに力をつけさせているな、という実績を上げていただければと思います。子育てをしやすい、子どもたちがたくましく賢く育つというところも含めて流山市をアピールすれば、流山で子どもを育てたいという若いご両親がきっと集まってくると思います。

**井崎** これから流山は子育ての部門で全国的にも新しいしくみや事業に挑戦していきたいと考えていますので、その時にはぜひご支援のほどをお願いいたします。

**坂東** 流山ではこんなことをやっているよ、やっているよと市長がトップセールスでどんどん発言されるといいと思います。期待しています。